

「青海千里洞活動にあたり

夫婦岩 勝 人

オ三次青海千里洞調査活動を計画するに当つて、日程・メンバー構成・装備・トレーニング等の観点から話を進めることにする。

<日 程>

たび重なる洞窟班集会は今年の夏(8月15日から24日)に計画していた、オ三次青海千里洞調査活動が事情により延期された問題をどうするかであつた。冬季休暇を利用して、冬山装備で活動する日程や、春季休暇を利用して活動する日程等が組まれたが、昨年3大学合同で行つた経験からみて、そしてメンバー構成上今年中にやるのが最良とされ、休日・祝日等のかねあいからみて、10月29日から11月5日の日程の案が浮き彫り出された。

<メンバー構成>

次にメンバー構成は、A地点の確保要員、B地点の連絡・確保要員、アタック要員等を見積つて最低15名が必要とされたので、洞窟班の者だけでは到底足らぬので、各パートの者に活動参加を募つた。その結果、アクアラング班から渡辺彰二(商3)、金子史郎(経1)、滝久八(経1)、そして調査班から西田信隆(経1)それに特にO・B・佐保野博氏の参加も決定して、メンバーは16名となり、必要数を完全に満すことが出来た。

<装 備>

洞窟班装備で重要なもの、特に縦穴洞窟においては絶対に不可欠なもの。それはワイヤー梯子であると言えよう。昨年の3大学合同、オ二次青海千里洞調査活動では、ワイヤー梯子装備は20m2本・15m2本・10m5本計120mであつた。120mのワイヤー梯子で昨年底に到達出来なかつたということは、今年はワイヤー梯子切り離しをして、それを下へたらしこと

を考へない限り、昨年以上のワイヤー梯子が必要とされるわけであつた。今年の7月に新しく製作したワイヤー梯子15m2本・20m1本・計50mを含めても我が部の保有するワイヤー梯子は110mである。このままで活動に入ると、必然的にワイヤー梯子の切り離しをせねばならぬことになり、そうすれば時間をくい、スピーディにアタックを行うことが出来なくなると想定された。だからワイヤー梯子借用を、昨年活動を共にした大阪大学探検部に要請することになつた。借用に行くと快く引き受けて下さつてワイヤー梯子15m4本計60mを貸してもらうことが出来た。このことでワイヤー梯子装備は総計170mという膨大な数になつたのである。

主に縦穴洞窟でザイルを使用する時は、ジツヘル用ザイルとしての役割を果たすことになるので、1つの消耗品として考え、活動に当つては事前に点検し、耐久力を見る必要がある。12mmナイロンザイル40m1本と36m1本計76mしか在庫していなかつたので、12mmナイロンザイル40mを3本計120mを購入するようにした。これにより12mmナイロンザイルは総計196m用意された。

今年の夏、8月8日より11日まで岐阜県郡上八幡美山で行なわれた、大阪市立自然科学博物館と共同での、熊石洞古生物調査で使用したニッコーライトは、照明威力を十分に発揮し実証したので、装備の1つに加え、連絡通信用として初めての試みではあつたがトランシーバーを使用することにした。

<トレーニング>

活動に入る迄に絶対必修条件の1つ、予備訓練は、今回縦穴に初めて入る者も数人いたので特に慎重に行なわれ、10月15日、22日は経商オ2学舎の壁を使つてワイヤー梯子の登り降りのトレーニングを行つた。もう10月の中旬にもなると日没も早く、トレーニングが終る頃にはいつも薄暗くなつていた。

10月23日には宝塚の蓬来山峽まで足をのばしワイヤー梯子の登り降り、確保の練習、岩場でのトラバースの練習、アツプザイレンの練習等洞窟入洞のための基本技術の修得をし、これによつて活動に挑む体制を整えた。

◇ ◇ ◇ ◇

日増しに秋深く野山の紅葉が一層目にしみる頃再び青海の土を踏んだ

私にとつて青海千里洞は今回で2回目の経験であり、昨年10月8日より13日まで行なわれた3大学合同才二次青海千里洞調査活動が初めての経験であつた。今年の活動は10月29日より11月5日迄行なわれ、時期的にいつてほぼ昨年と同じ秋季であつたことは、昨年の経験がそのまま活用されることになつた。福来ケロより涸沢に沿つて登つて行くとマイコミ平に着き、そこには数多くのドリーネを見ることが出来、青海千里洞はここに存在し大きな口を開いていた。

昭和39年愛媛大学が愛媛県大野ヶ原でつくつた、日本の縦穴最深記録216mを破り、新しく最深記録を樹立した今回の成功も、冷水が壁を伝い滝のように流れ落ちる暗黒の地底に、どれ程好条件に恵まれたとしても、人間の耐久力の極限に近い意志の力がなければこの企ては成し遂げられなかつたろう。

ワイヤー梯子がするすると最初の65m分が降りていつた。ヘッドランプのついたヘルメットをかぶり、軍手をはめ、地下たびをはき、防水の為にレインコートと作業服で身をかためた何時もながらのいでたちで巨大な縦穴の入口に立つた。不安と期待が悪夢のように奇妙にまじり合つた気分だつた。ワイヤー梯子を降りはじめると、なだらかな傾斜で地下へ地下へと続く最初の部分は、粘土質の壁であり、落石が非常に多いと考えられ危険な個所である。若しこんな大きな岩塊や樹木が落ちて来たらノと考えるとゾツとする思いだつた。一瞬背筋に冷たいものが走つた。不必要な恐怖感ば筋肉を硬直させ選

動能力を低下させる。不吉な予測をするのはやめにした。

やがてオーホールに着くと入口附近からもれて入つて来る陽光で雪溪がぼんやりと姿を見せ、傾斜して横たわつていた。雪溪の横側に沿つて行くとB地点につながるチムニーの入口があるが、その辺りまで来ると陽光と完全に遮断されてしまう。全くの暗黒と静けさの中でシンシンと寒さだけが身体を刺激するだけである。だから自然と新陳代謝活動は低下し、やがて身体が不慣れな環境に適応しはじめ、新しいバイオ・リズム(生体反応曲線)がとつて代るようになつた。

実行動4日間のうち、私は才1日目にはA班に属し、B地点よりトランシーバーでアタックの三戸さん川上君と連絡をとり、底が横穴となつて続いていることを、いち早く知つた。三戸さんが先にB地点まで上つて来てから私はC地点のテラスまで降り、D地点で待つている川上にザイルダウンを行つた。1・2回ザイルは通らなかつたが、ようやくザイルが通つた。C地点のテラスは落石の心配はないが冷水が雨模様になり、寒さがシンシンとしみ込んで来るのであつた。川上がB地点迄上つてからは、私はB地点へゆつくりと上つて行つた。才2日目の午前中はA地点で待機することになつた。午後になつてA地点とA'地点にあるテラス②へ降りた。A地点とA'地点にはテラスが3つあるが、どのテラスも落石の危険が十分ある所で、この日も大きな樹木と岩塊が落ちた。冷水は壁を伝い流れ落ち、僅かばかりのテラスの面積は安定性がなく、向い側の壁が不思議な程押し迫つて来るように感じ、威圧されているかのようであつた。そしていよいよ才3日目の本格的なアタックの日は、あいにく朝から雨が降つていた。私はその日B班に属していたのでA班が降りると直ぐ私も降りた。するとA班の者が、すごい増水の為B地点確保が無理であると帰つて来たのであつた。残念に思つたと同時に巨大なこの洞窟のスケールをもまざまざと知り、雨による増水がこれ程、直ぐに影響

することを知らされた。才4日目は午前中測量と写真を行ない、午後から撤収となつた。私は午前中の測量に加わつた。A地点からB地点までの測量であるが、この日も雨が降りしきり昨日の雨水と共に増水して、才二ホール辺りでは天井からゴーゴーと滝のように水が落ちていて、チムニーの所も増水が激しかつた。この為測量は機敏に行なわれた。午後からの撤収も順調に作業が進んで、青海千里洞に別れを告げた。10月4日ベイスキャンプのおかれていた川原を後に出発した頃には、風が落葉を舞い上がらせていた。青海千里洞よさようなら、又来る日まで…………… いつしかそんな感激がわびしさと共に心に迫っていた。

ケイピングにおける確保について

木 本 貴 夫

キスリングをかつぎ出発しようとした時、身震いするようなサイレンの音が谷間に鳴り響く。縁起でもねえ、続いてハツパが2発。黒姫山の一角がナダレのように崩れ落ちる。キスリングと同じ位の石が飛ぶように近く迄落ちた。若しもこれが洞内であれば？　ここは福来ケロの石灰岩採集場である。ここから日本海を背にし、沢伝いに登つて行くのだ。ヒヨロ長い木が密生し手でよけながら歩く。まるでジャングルだ。探検らしい気分になる。沢伝いに歩くこと3時間、無事目的地に着く。青海小穴は、大きなドリーネの隅に丸い口を開けていた。枯葉が吸い込まれるように洞内に散つて行く。洞内からは異様なガスが立ち込めて来る。才三次青海小穴探検における僕の主たる任務はザイルの確保だ。これは予想していた。このような本格派の縦穴には経験がないからだ。この洞穴入口附近は、日が当たらないらしく、一面にコケが生えている。数十メートルもあるデツカイ、ドリーネの壁が日を遮ぎつてゐるのだ。辺りは陰気で冷たく、シーンとしている。暗闇の、未知の、神秘的な地底世界と相応しているかのようだ。唯一つ、今度こそ「地底を征服してやるぞ」の、皆の活気だけはみなぎっている。入口の直ぐ後にある大きな岩にザイルを巻きつけ、片方の端で自分の体を確保する。もう一方のザイルの端を、肩から脇に通し掌で握りしめ、足をピンとのばして確実に足場を踏みしめる。背をのばし、体を後に傾けた。何れもショックに対する態勢だ。これは確保の鉄則である。スリップした場合、どれだけのショックがくるかは数多い練習で体得していた。洞内に降りて行く人の動きは、張りつめたザイルを通して理解できる。ワイヤー梯子を一段一段と降りて行くその動きに合わせて、ザイルを少しづつ手繰りダウンさせるのだ。手繰りする時は、必ず